

加藤周一^(注1)における文化の雑種性をめぐって

ジュリー・ブロック

加藤周一はフランスの研究者には『日本文学史序説上・下』^(注2)の著者としてよく知られているが、日本においてはこの本は文学史というよりはむしろ思想史の書物として認識されている。加藤はまた、西洋文学の研究者、エッセイスト、そして『羊の歌』と題する自伝の著者としても名高い。二〇〇〇年三月には、加藤の長時間インタビューを中心構成された3時間の特別番組がNHK教育テレビで放映され、^(注3)二〇〇〇年十月には、加藤をテーマに福岡ユネスコ協会主催の国際セミナーが福岡で開催された。^(注4)

このセミナーでは加藤の全著作の形成過程の解明がはかられたが、その際特に話題となったのは、一九五五年の発表直後から加藤を日本で有名にした論文の『日本文化の雑種性』^(注5)であった(以下「雑種性」と略記)。第二次世界大戦の一〇年後と言えば、権力の座にあった軍部を支える主な論拠であった文化の純粹性という概念の影響を受けた人々がまだまだ多かったが、そのような時代にあつて、この論文のタイトルそのものが挑発的であつたし、執筆者である加藤自身も論争をいとわない思想家として断固たる姿勢を示していた。

本稿の目指すのは、加藤の思想の要約と批評を通じて『雑種性』の中核にある問題について彼の思想の主な立脚点を明らかにすることである。ついで、加藤の比較文化研究者としての視点を明確に浮かび上がらせ、彼独自の方法論に基づきながら、文化の雑種性という概念の普遍性を証明したい。最後に、哲学的視点に立つて引き出される結論として、加藤が抱える矛盾にも触れることにしよう。

しかし、何よりもまず、一九五五年に書かれたテキストに今日立ち戻らねばならないのはなぜであろうか。第一に、加藤自身が『雑種性』の末尾で指摘しているように、彼の目に日本文化の雑種性は、単なる概念や理念というより全著作活動を通じて表明し続けていた内なる確信、一種の「信条の告白」ともいべきものと考えられていた。したがって、彼の著作と思想を真に理解する上で問題の根幹をなしていると思われる『雑種性』を参照せずに済ませることは不可能だからである。第二に、文化の雑種性という概念そのものが、世界的なグローバル化の過程の影響下にある現在においても、なお

その重要性を保ち続けているからである。グローバル化の動きは日本でも、またヨーロッパやその他の地域においても等しく全国的抵抗に出会っている一方、ナショナリスティックな傾向を再浮上させてもいる。このような時代背景の下では、歴史の読み直しこそが、まず研究者や知識人の果たすべき責任なのである。その意味で、今日加藤周一の著作を読み、または読み直すことが必要とされている。

要約と批評

加藤は、前近代及び近代日本において《純粹な》日本文化という思想を作り上げようとした二種の思潮を図式的に示している。基本図式を手短に要約すると、第一の思潮―後に国学という名を得る―は、一八世紀半ばに確立され始め、日本文化はその起源から純粹だったとするものだった。^(注6)加藤は樹木の比喩のイメージを用いて、この第一の思潮の狙いを明らかにする。彼によれば、これは「西洋種の枝葉を除いて、純粹に日本的なものを残したいという念願に基づいている。だが、戦後の批判的思想の台頭によって、そのような仮定は幻にすぎなかったことが明らかになった。この第一の思想傾向は今日でも、ここから発展した超国家主義的イデオロギーに好適な土壌となっているように思われる。

第二の思潮は、これと反対の方向を目指すもので、明治期に生まれ、「近代主義者」と呼ばれた近代化推進派の知識人が導入したものである。加藤は同じ樹木の比喩を用いて、彼らは第一の思潮とは

反対に「日本種の枝葉を落として日本を西洋化したいという念願に基づく」と述べている。近代化推進派の人々は、日本は西洋の発展に較べて遅れを取っていると想定し、際限なく西洋というモデルを模倣するという意味での近代化を推奨し、日本文化は古すぎると決めつけてこれをうち捨てしまったのであった。

自国の学問という意味での「国学」の運動が外国文化に対する恐れによって鼓舞され、外国文化を侵略と受け止めていた一方で、近代化を推奨する「近代主義」の運動は、同じ外国文化によってこの派の人々が魅了されていたことを示している。しかし、外国に対する反応が魅惑によるものであれ反発によるものであれ、外国文化と日本文化の片方しか尊重しない場合には、結果としてもたらされるのは、不毛で形骸化した文明という形の挫折でしかない。かくして、歴史を振り返ってみた場合の最終的な結論は、近代日本の誕生の特徴であった純粹化の二種のモデルの放棄なのである。

日本人が仏教と儒教の影響のもとに読み書きを学んだ遙か昔の時代を取り上げて、加藤はこの機会を日本文化がその起源から雑種であったことの証明だとし、同時に、その頃の日本人は外国のお手本を受け入れるだけで満足したのではなく、そこからたらされる成果を育もうと努力した証だったとする。かくして、中国から移入した文字表記体系は日本語に固有の体系へと適応を遂げた。同様に、仏教は徐々に在来の信仰と混交して日本仏教に独自の形態を取るに至った。加藤はこれらの実例を通じて、文化の豊穡化の過程としての雑種化が必要だということを示しているが、同時に、豊饒化の成

果は結局、長い年月を経た後で、適応であると同時に創造でもある過程を通さないと得られないことを明らかにしている。適応と創造のもたらす果実を成熟させるために必要な幾世代にも及ぶ努力こそ、加藤が文化と呼ぶものなのである。

加藤は最後に、キリスト教の影響圏外にある工業国のうち、日本はヨーロッパの植民地にならなかつた唯一の国だと述べている。この現象は世界の他の国々と比較した場合の日本の最も注目すべき特殊性だと彼の目には映っている。そして、日本のアイデンティティを最も深い所で探ることを可能にする他の国々との相違点とは、日本の先行世代が外国の文物を移入した際に示した素質のことだと著者は力説するのである。それは受身の態度ではなく、それどころか、外来文化をみずからの文化の産出に役立たせ、また外国の支配に對抗する手段として利用するための素質であつた。

この結論から、今日の日本人にも役立つ根源的な思想が浮上してくる。というのは、加藤が日本人に想起させようとするのは、国境を閉ざしたり交流を拒絶したりするのではなく、逆に、創造し、かつ適応するための過程を通じて、みずからの道具を作る手本として利用するために、人材、文物、思想、技術の受け入れを促進し、主に中国や朝鮮経由の外国文化の単に一方的な侵略に抵抗するすべを知っていた遙かな先祖の姿に他ならないからである。

伝統文化からオリジナルな形態や様式を作り出すために新たな道具を製作や利用することができた祖先と同様に、現在の世代も、明

日の文化を産み出し、また見つけ出す可能性として外来の文化を活用せよと加藤は促している。かくして、雑種性は、より豊饒で、創造的で、希望を孕む社会の創設原理だと思われるし、純粹を気取り、雑種化という真実を拒絶して、過去と未来を取り違えた悪循環を無限に繰り返すしかない偽りの社会の対極に位置するものなのだ。

歴史的背景の指摘

加藤の最初の英仏滞在に触れている「雑種性」の冒頭部分に注目しよう。当時二五才だった加藤は、両国の市民が生き生きと示したナショナリズム（愛国心）の意識に驚く。彼の目にはこのナショナリズムが英仏両文化の特徴である《純粹性》の証拠だと映った。まさにこの点を出発点にした加藤は、その対極に日本文化に固有の雑種性という概念を仮定した。ここで、加藤がフランス文化の前提として考えた純粹性についてしばしば考察してみたい。

まず、加藤自身が「雑種性」の本文直後に置かれた追記ではこの印象をくつがえしているということを述べておこう。おそらく、加藤は後になって、イギリスや日本と同じくフランスもまた雑種性格を示しているということに気付いたのだ。言うまでもなく、フランスは、ローマ人、フランク族、アラブ人、スペイン人、スカンジナビア諸民族、ノルマン人に占領されたことがあり、ついで、イタリア、オーストリア、ポルトガル、ポーランドから、最近ではブラックアフリカ、マグレブ諸国、中国やトルコからも移民労働者を受け入れている。これらの人々は皆自国の風習、言語、文化をそれ

ぞれ持ち込み、それらはフランスに元々あった文化と混交し、葛藤を孕みつつも活発で色彩ゆたかな総体を形成した。その全体に対して現在フランス文化という名称が付与されているのである。また、フランス共和国憲法はフランスの領土内に生まれたすべての個人に市民権を認めていて、生物学的または民族的な純粋性という概念そのものが、フランスの現行憲法体制下でなんの意味も持たないこともまた、周知の事実である。

勿論『雑種性』の末尾に追記を加えるにあたって、加藤は上記の事情は全て呑み込んでいたはずだ。しかし、この追記によっていささかのニュアンスが加られていることを考慮しても、国家の純粋性という概念が追記から徹頭徹尾排除されているわけではない。加藤は国家の純粋性という概念を自分の雑種性理論を展開するための基本公理として用いているのである。

彼の視点を理解するには、おそらく、若き加藤が初の洋行を企てた五〇年代という歴史的背景にもう一度身を置いてみなければならぬ。その当時はフランス人自身も、戦時中のフランス系ユダヤ人の強制収容や、植民地に対する帝国主義的抑圧の責任についてまだ意識してはいなかった。祖国解放の雰囲気の中で活発になった愛国的・共和主義的な価値を謳歌するなかで、フランス人みずからが全国的統一という印象を確固たるものにし、その統一感が若き日本人旅行者の加藤に幻想を抱かせたのだろう。

それから五〇年後の現在では、フランス人が自分自身に向ける眼

差しもかなり変化した。民族的であれ文化的であれ人種的であれ、純粋性という概念は、多数の知識人、歴史家、もしくは政治家からも激しく攻撃されていて、おそらく、現在のフランスでこれを擁護する者は極右のごく一部のグループを除けばもはや存在していない。そしてこの同じ五十年間に加藤は絶えず研究、執筆、旅行を続けていた。彼自身は若き日の労作を今日どのように読み返しているのだろうか。加藤みずからがこの疑問に答える機会を最近NHK教育テレビが提供してくれた。時事ドキュメンタリーと短いコメントをはさんだ長時間インタビューからなるきわめて興味深い三時間番組で、加藤の初期仮説を説明しその理解を深めるのに大きく貢献するものであった。

ここで再度確認すると、フランスという国家の《純粋性》という考え方は、加藤の若き日の著作である『雑種性』の基本概念の一つであるが、それは単に日本文化の雑種性を論証するための支点として用いられているに過ぎない。言いかえれば、雑種性は日本文化に固有の性格であって、加藤が「純粋」であるとみなした他の文化（中でもフランス文化がその代表例として挙げられている）の対極にあるものと仮定されているのである。しかしこのような仮定はまさに加藤の論証の弱点に他ならず、著者自身も証言している通り、それは初めて洋行した若造の持ち帰る単なる旅の印象を越えるものではなかった。

爾来五十年を経た今日の加藤の発言は、より説得力を増している。彼は前記のテレビ番組中で、江戸時代の国学に始まり、明治時代以

降に創り出された造語で「自国の言語、文学、文化」を意味する国語、国文学、国文化などに至る日本語のいくつかの表現に暗黙のうちに含まれるナシヨナリズム（自国中心主義）的な性格を指摘して（注）いた。

加藤が彼自身の最初の洋行の話をしているので、筆者もこの機会に自分の体験を述べさせていたと、日本に來たばかりの外国人には上記のような表現が普通に使われていることは驚きであった。もちろん時間が経つにつれて現実はより複雑で多様であることが分かるようになったが、五十年代にフランスに滞在した加藤と全く同じように、私も最初は、ある種の国家意識を国民全員が異口同音に表現しているという印象を抱いた。

しかし、今日の加藤に話を戻そう。彼がテレビで告発しているのは、これらの表現の中に、ある文化なり言語なり文学なりが、唯一土着のものであるとする考え方が暗黙のうちに含まれているという事実なのである。「国文化」がどの国の文化を指すかということ、それは日本のことであると名指しする必要もないほど当たり前である。その規定は、唯一であると同時にあまりに特殊な本質に基づいてなされると言える。加藤周一は、「国」と呼ばれるものが日本の他にはあり得ないというような、この種の明白さに含まれるイデオロギーの存在を強調してみせる。このようなイデオロギーは、ありふれた人間のやりとりの中に身を隠しながら、何の抵抗にも出会うことなくはびこっていくのである。歴史が繰り返されるその日まで：

方法論に対する論評

まず、次のような仮説を提案しよう。文化の《純粋性》という概念が西洋に初めて滞在した若き学生の持ち帰った旅の印象にすぎないものであるとしても、日本の言語と思想史の分析を通じて、加藤のこの主張にもっと客観的な根拠があることを明らかにすることはできないであろうか。すなわち、加藤がフランスで見出しと信じたかの《純粋性》は、むしろ、彼が旅行カバンに入れて携えて行った概念、そして、鏡を通じて見たときのように、日本の姿が外側から見えた際に自覚された概念の反映だったのではないか。

このように考えると、加藤周一の『雑種性』を支える方法論についての最後の論点へと我々は導かれる。加藤は言語や文化の壁を越えてその名声を確立することができた、日本の知識人のうちでも希有の存在である。メディアの世界でも雑種性の概念は成功を収めているが、その理由として、日本人は加藤の作品の特質である開かれた明晰な精神を挙げることが多い。しかし、筆者の見るところでは、作品の特質そのものが、加藤が大胆に用いている方法に起因している。なぜなら、加藤は伝統的な学問研究の潮流からは距離を置きつつ、専門的な意味での比較文化研究というあまり人の踏み込まない道に分け入って研究しようとするからである。

だからといって加藤は歴史的分析を無視するわけではない。例えば文学史研究がその証拠である。とはいえ、ある種の専門研究者のように対象を顕微鏡で調べるだけで満足しているわけではない。逆

に、彼の研究が始まるのは、学者が顕微鏡をただの反射鏡と取りかえた時点だと言ってもよいだろう。視るための道具をこのように取りかえたと新たな研究分野と新たな探求の視野が見出されるが、同時に、従来の学問の境界線の外に位置するこのような研究分野にふさわしい方法論上の問題が明らかになってくる。というのは、彼は必然的に二個かそれ以上の専門の極を持つことになるのだから。この機会に、二重の対象に基づくこのような研究形態を《純粋な》知識を追い求めるアカデミックな研究と対比させて《雑種的なハイブリッド》と呼べないだろうか。

そこで、加藤の手に比較文化研究者の道具である鏡を返してみよう。そして、初の洋行の折りにかいま見た《純粋な》文化は、旅立つ以前から彼の心中にあつて、外国文化を観察するうちに露わになってきた《純粋性》に他ならないと仮定しよう。従つて、著者自身と著者の言語と文化に、誤つてフランス文化に付与された純粋性という仮説を差し戻そう。そう見れば、日本文化の雑種性は外国文化に想定された純粋性と対立するものではなく、むしろ、雑種性は日本の思想そのものをつき動かしている矛盾を表現しているのだ。日本の思想は、特に中国からの借用という歴史的真実と、それを否認したい気持ちとの間で揺れ動いている。こうした否認は、文学・哲学・政治等の様々な思潮を通じて、信仰や神話やその他の想像的解釈によってなされてきたのである。

雑種性から普遍性へ

外国から移入した知識が土着の思想や伝統の領域で融合して独自の創造へと変わる場合、人々の意識の中でその由来を示す印が消し去られ、代わりに、土着の起源を持つものとされることがある。その際、かつては外来のものだったということが忘れられ、今や自国のものと考えられている知識は、さらに上位の認識の対象、つまり、精神的・超自然的・神秘的な秩序の対象となつて、その国の文化や芸術に組み込まれてゆく。その意味で、芸術や文化の伝統は、外来の知識を吸収して同化してゆく要因なのであるが、この伝統という豊かな世界の内には、あるイデオロギーが隠れていることがある。それは、元からその国に住んでいた神々が糧としている《純粋性》というイデオロギーである。このイデオロギーが最終的に求めているのは、純粋性を損なうおそれのある外来の要素の破壊なのである。このような純粋性という前提に対して、歴史学者としての加藤周一は戦いを挑んだのである。

比較文化研究者として加藤が示すのは、我々が世界の他の国々へ向けることのできる鏡である。その時我々が気づくのは、ナシヨナリスティックなイデオロギーの危険はどんな文化にも潜んでいるということである。同時に我々は、想像力や信仰心を鼓舞する《純粋さ》という概念を無効にせよという加藤に賛同して、雑種性の原則はあらゆる文化の基底にある必要条件ではないのかと考えてみても無駄ではないだろう。そう仮定すれば、加藤が明らかにした雑種化という原則を否定するどころか、最終的に、そこに普遍性を仮定す

るまで雑種性の有効領域が拡大されることになる。こうして、雑種性の概念的意味が認められれば、文化を考察する場合、雑種性は地理的・民族的・文化的な国境線とはかわりなく、常に基本仮説として刻印されているということが理解されるだろう。

言語の場合であれ、芸術的伝統の場合であれ、表現の有効性が発揮されるのは、交換・交流の手段になった場合である。言語の持つこのような媒介機能はこの上なく普遍的なものであり、言語みずからのアイデンティティの基盤の必要条件としての他者の認識の際に発揮される。そして、文化というものは、ばらばらのものを一つに統合する要因であるが、それが平和的な目的を果たすことができるのは、ただ他の文化との接触を通してのみなのである。特殊な、特有の、オリジナルな文化という観念が芽生えるのは、このような本源的な他者との関係の中でしかありえない。

人間の在り方を問うための議論

本稿において、上述の三時間に及ぶテレビ番組中で行われたインタビューを要約するには時間も紙数も足りないが、ここでは、どの記録や、作品からの引用や、発言をとつても、それはもっぱら戦争をめぐるものだった。加藤の八〇年の生涯を通じて地球上に絶えることのなかったあらゆる戦争の総括的な検討が行われていた。番組の冒頭から、早くも加藤は、戦死した友人にして抱く悔恨の情を打ち明ける。彼のコメントは犠牲者に共感しながら、歴史の詳細にわたる分析を通じて問いかける。時として人間にとりつき、そして、

ある時は他人や自分に暴力による死をもたらすような道具へと人間を変容させる殺戮の狂乱とは、いったい何であるか、と。

加藤自身が文化を樹木にたとえているので、筆者も同じ比喻を借りて番組の本質的なモチーフと思えるものをまとめてみよう。念のため言っておくが、まず、比喻が平凡に見えるのは、戦争それ自体もまた、人が受け取る大量の情報の氾濫の中でありふれたものになっているからである。おそらく、同じ理由によって、ある種の心理学者の目には、加藤はセンサーシヨンの不足に悩む単なるジャーナリスト、もしくは、分かり切ったことをわざわざ説明したがるはったり屋のように映るかも知れない。

優秀な論客である加藤周一は祖国日本においても誹謗者に事欠かない。例えば、帝国大学の医学生という地位に守られていたおかげで、同年齢の他の日本人のように前線に送られなかったことを非難する人もいる。さらに―彼の論拠の構造を問い直すことによって筆者も批判を展開してきたが―、彼の分析が批判され、分析の妥当性が論議され文体が賞賛されるかと思うと、あべこべに非難されることもある。だが、現代日本の研究者たちの世界における加藤の位置づけや、彼がもたらした日本認識のより広範な探求についての必要な総括を行うことはひとまず置くとして、ここではただ、『雑種性』において筆者の関心を引いた問題、人間の在り方を問いかけるという意味での哲学的な問題に限定して論じることにしよう。

加藤自身が語り、かつ示しているように、彼がテレビに出演する

ことを望んだのは、戦争について証言し、人前で彼自身の後悔や苦しい体験や、彼が感じた無力感を語るためであった。ここですぐに比喩的な結論を述べるとすれば、際限もなく続く戦争とは、文化のもたらす毒の果実ではないのか。犠牲者の苦悩と死刑執行人の憎悪のなかで熟してくるこの果実は、他者の拒絶のうちに太り、毒ガスとして発散され、砲火、対人地雷、爆弾として賞味されるのではないのか。歴史家が我々に思い出させるのは、もはや証明の必要もない事実だけである。せめて我々としてできることは、加藤の執念を理解し、戦争にこだわり続ける思いを分かち合い、歴史家としての彼の誠実さを評価することである。ここで彼の客観的な仕事に、個人的な思いを含む主観的な視点が重なってくる。それは、このような作業にあたっては、歴史的距離を取りながらも、人間という主体が歴史の検証の場に引き出されなくてはならないということを示しているのである。

ナシヨナリズムは避けられない宿命なのだろうか。そして、拡大主義的なイデオロギーは本当に解決済みの問題なのだろうか。思想家加藤の懐疑主義が歴史家の厳格さに付け加わり、資料的配慮の行き届いた、構成員に豊んだ研究を生む源泉となった。研究はそれ自体としてどんな場合でも分析や批判的論評を逃れることはできない。だが、筆者がここで明らかにしたいのは、加藤周一の研究はイデオロギー上の欺瞞に対する闘争の一環をなすものであるが、だからといって、それは単なる分析や情報収集作業に限定されてはいないという点である。なぜなら、余分な枝を落として剪定する人の望むままに矮小化される樹木という加藤の比喩のイメージを越えて、

もう一つの仮説としてのイメージ、すなわち元気に密生して生い茂る、繁殖に必要な接ぎ木を拒否せずに受け入れる樹木というユートピアのイメージが透けて見られるからである。比喩にこれ以上深入りするつもりはないが、ただ、結論としては、加藤周一の研究の秘かな動機に、合理的思考と共に流れ、思考の流れる方向を定める詩的な着想の源があると言っておきたい。詩的な着想の力を云々することは、学問的な批評をする際には疑いもなく欠陥に思われるが、その力こそ、人間の側にあるもので、学問にとってはつまづきの石なのである。そこでは、理性は詩性を帯び、学問の真実は人間的眞実に重なり、眞実が探ろうとする対象は、理性的分析の範囲に止まらず、内側から賞味される本質にまで及ぶのである、正に、果実のように……

注1…一九一九年東京生まれ。東京大学医学部卒業。主な著作は『日本文学史 説上・下』『羊の歌』『芸術論集』などで、これらは『加藤周一著作集』（平凡社）に収録されている。八〇年代には『平凡社大百科事典』の編集長を務める。朝日新聞に『夕陽妄語』を執筆中。文学や美学にとどまらず、哲学、文明批評なども含めて、言葉の最も本質的な意味における百科全書的な批評家と言わなければならない。プリティッシュニコロンピア大学、ベルリン自由大学、上智大学、立命館大学などの教授を歴任。

注2…『日本文化史序説上・下』 仏訳はE. Dale Saunders. ファイヤール出版、一九八三年。全3巻。

注3…『加藤周一、歴史としての二十世紀を語る』制作統括…畠山経彦、桜

井均。二〇〇〇年三月にNHK教育テレビで4回にわたって放映。

注4…『世界における日本研究と加藤周一』 日本研究に関する福岡ユネスコ協会主催の第十一回国際セミナー。二〇〇〇年一〇月二六日と二七日の両日福岡で開催。

注5…『日本文化の雑種性』 一九五五年に同じタイトルで岩波書店の雑誌「思想」に初出。『加藤周一著作集』（全24巻、東京、平凡社、一九七九年）中の『近代日本の文明的的位置』（7巻、p.5-29）にも収録されている。同書に収録の『雑種の日本文化の希望』（p.30-46）も参照した。

注6…筆者がここで触れているのは「国学者」と呼ばれている思想家・学者・知識人たちのことである。「国学」という用語は、江戸時代中期に始まり、〈古代の記録を通じて仏教と儒教の到来以前の日本に固有の思想様式を探り、それにより、倫理・宗教・哲学の面において日本人の進むべき規範となる道を形作ること〉を目的とした、自国の研究を指す。
(Dictionnaire du Japon, 東京, 日仏会館出版, v.XIII, p.32-33, kokugaku 1)

注7…前述のNHK番組の第4回（最終回）「ナシヨナリズムを越えて」。

翻訳 東郷和子